

親族集団からみた集落空間の構成に関する研究 － VK集落を事例として －



K07029 大和田 隼人

Keywords

VK集落 親族 住居配置
土地 親子

1. はじめに

1.1 研究背景

国内外の様々な自然発生的な集落では、独自の文化や習慣、言語などを持つ人々が暮らしている。そこでは、自律的に社会がつくられ、特徴的な居住の仕組みがかたちづくられている。

いっぽう、我々の住むまちや都市にも地域によってさまざまな特性をみることができる。それらには、自律的な社会の中でうみだされたであろう特徴をうかがい知ることができる。現在の我々の住むまちと、各国における集落は表層上全く異なるものに思える。しかし、構成の根源には、共通する部分があるのではないかと筆者は考える。

以上をふまえて、本研究では、ラオス国内のひとつの集落を対象に、とくに人と人の関係や共同性に着目して、社会と居住空間のかかわりを探る。

1.2 研究目的

ラオスは多民族国家であり、2008年時点で49の民族集団が認められているが、その数は調査年によって異なるものが多い。分類された民族名以外の民族名を持つ人など、現実には49以上の民族が存在している。独自の文化や習慣、言語を持ち生活しているかれらは、どのように居住空間を構成してきたのか。

本研究では、親族関係に注目して居住空間を探っていく。集落というひとつの社会を構成する上で、親族関係は大きく関与するものと考えられる。社会集団としての親族関係を把握するとともに、その関係性が実際の居住空間をかたちづくる上で、どのように作用しているのかを明らかにしていく。

2. 研究方法

調査期間は2010年9月4日～10月3日の30日間であり、この期間におこなったフィールドワークをもとに研究を

進める。

調査内容は、集落の実測、各世帯の住居の実測（平面図・断面図、屋敷図）、インタビュー調査（世帯構成、宗教、就寝・食事形態、耕作物、家畜、電化製品の所有、年表、出身地）、加えて集落全体の事象について村長にインタビュー調査をおこなった。

3. 調査地概要

ヴィエンチャンから北部へ約100kmの場所に位置する（図1）。人口は292人（男性：149人、女性：143人）、住戸数（世帯数）は61戸であり、タイ・プワンの人々が居住している。

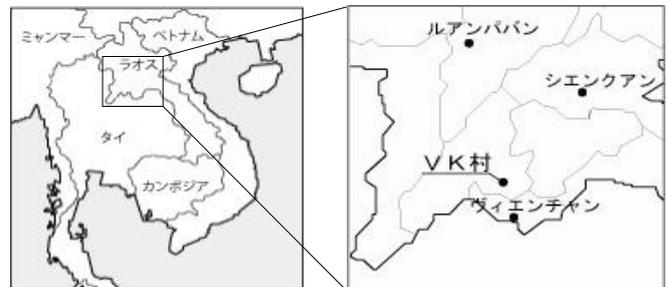


図1 調査対象地

3.1 形成過程

1960年にベトナム戦争が起こった。ベトナムに近いシエンクアンの集落に暮らしていた人々は、戦争から逃れるために移住を計画した。そこで、1969年に政府に選出された集落の人々12人が下見をおこない、現在のVK集落となる新しい土地を決定した。

移住当初、川沿いに住居を建て生活していたが、1982年に洪水が起こった。その被害を避けるために、現在の位置に集落が移動している。その時に、集落内に寺院が建てられている。1972年には道ができ、2006年には舗装された。これにより集落と市街地が接合されるようになった。加えて、1993年に電力供給が開始されたことにより、電化製品などが多く購入され、生活で用いられるようになった。

3.2 集落空間

VK集落は全61戸の住居（高床式住居37戸、高床式住居で1階がRCの住居8戸、RCの住居16戸）、集落の北側の学校、集落の中心にある寺院で構成されている。また、集落内に売店を経営している住居が4戸ある。南北につづくミチが特徴的であり、基本的な構成として住居はミチの両側に配置される。しかし、ミチに面した土地がない場合、ミチ沿いではなくミチ沿いに建てられた住居の奥に配置されている。集落の中心、寺院の手前には住居がない共有地がある（図2）。また、VK集落内では住居群は4つにグループ分けされており、各グループ内での問題解決をグループ長がおこなう。

3.3 土地所有のプロセス

VK集落では、土地をめぐる争いを避けるために法律にそって正式な手続きをおこない、所有者を明確にする。集落内の土地管理者も同行し、実際に土地を見に行き、土地の広さや、所有者がいるのならば、登記されている所有者と一致しているのかなどの確認をおこなう。また、隣接する土地に所有者がいるのならば、その者の署名を必要とし、それらが済んだら村長のサインをもらう。その次に、郡の土地管理局に申請をおこない、より細かい調査がおこなわれる。その後、地券が発行され、土地を所有できるようになる。

親族などに土地を相続する場合でも、以前は口約束でおこなっていたが、現在はこの手続きが必要となる。また、同じ敷地内に別の人が住居を建設することは可能だ

が、その者に土地の所有権はない。土地を売る際は、所有者のサインが必要となる。

3.4 結婚

ラオスでは、男性が婿入りするのが一般的だが、VK集落では、嫁入りもある。男性と女性のどちらか側に両親を養う人がいない場合、そちらの住居へ行き生活する。結納金は男性が払うことになっており、その金額は払える能力に応じて決める。つまり、経済的にたくわえがないと結婚することは難しいといえる。また、その場合、結婚せずに同棲をすることもある。

遺産に関しては、その住居に住んでいるものに分け与えられ、性別、婿・嫁の分類などは関係していない。また、分家した世帯への贈与は必須ではない。

4. 親族組織図

VK集落では、集落内に分家した親戚が多い。この要因として、各世帯での息子、娘の人数が多いということがあげられる。住居一戸の平均居住人数は4.8人だが、子どもがたくさんいて成長した場合、一戸の住居にすることができる寝室などの空間の限界値を超えてしまう。そこで、分家していく世帯が多いのである。また、姻族関係が多く、集落内の親族をつなげていき、それが集落全体が一つの集団となった要因である。これは、村内での結婚が多く、横につながりが広がっているためである（図3）。

5. 親族集団の住居配置

分析を簡便にするために、A~Rの18グループに分類した。これをもとに、分析・考察をおこなう。

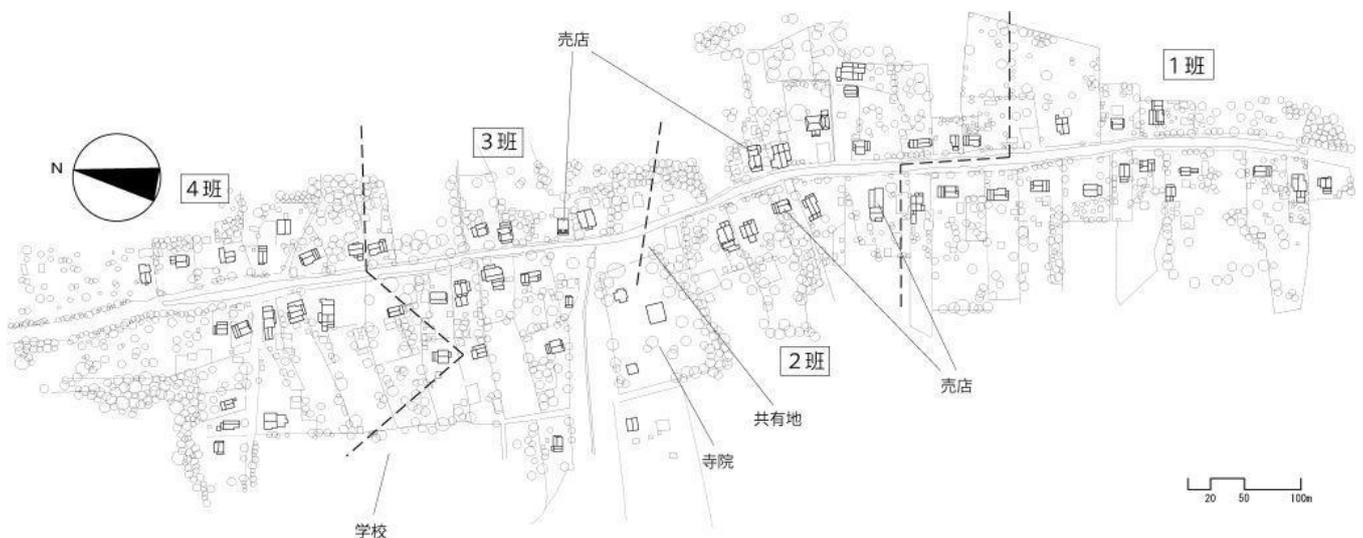
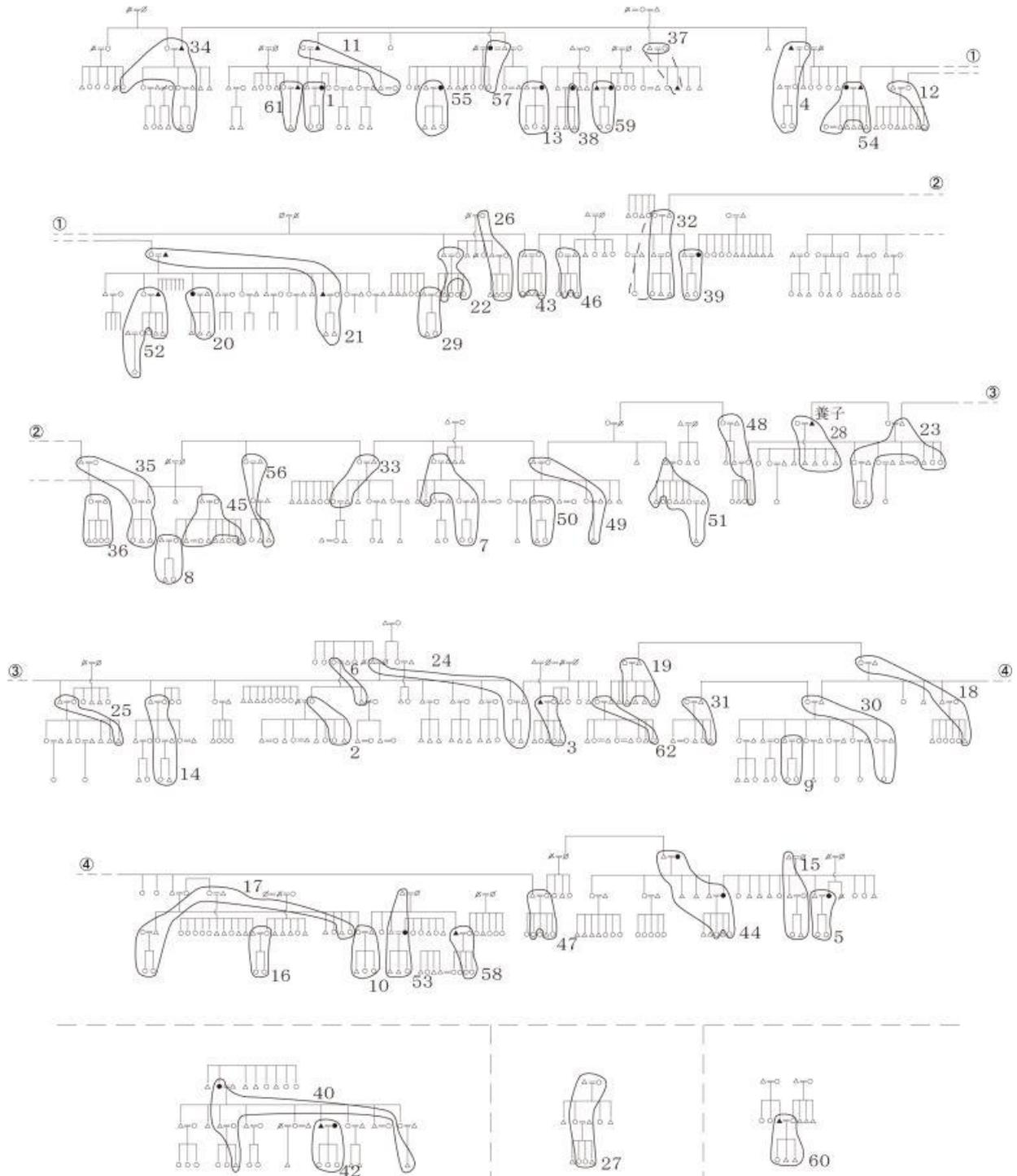


図2 集落図



※凡例

○：女性 △：男性 =：結婚 ≠：離婚 /：故人 枠線：居住者 数字：住居番号

図3 親族組織図

5.1 親族関係と住居配置

各親族集団内における住居配置から、親族集団内で居住場所のまとまりがみられた5グループを集合型(図4)、集落内にばらばらに住居が配置されていた13グループを分散型(図5)とする。集落内に親族関係がないVK-27、VK-60を独立型とする。分散型の割合が多いこ

とから、VK集落に住むタイ・プワンの人々は親族関係にもとづく集合意識があまりみられないと考えられる(表1)。

しかし、分散型の親族集団でも一部は隣接して住居が配置されている場合もある。それらの世帯は、分家をし、それぞれの世帯に親と子が住んでいる場合が多い。この

ことから、VK集落では、親族全体としての集合意識があまりみられずとも、親子関係にある世帯には集合意識があると考えられる。

表1 居住形態分類図

親族集団	
集合型	F、I、N、P、R
分散型	A、B、C、D、E、G、H、J、K、L、M、O、Q
独立型	VK-27、VK-60

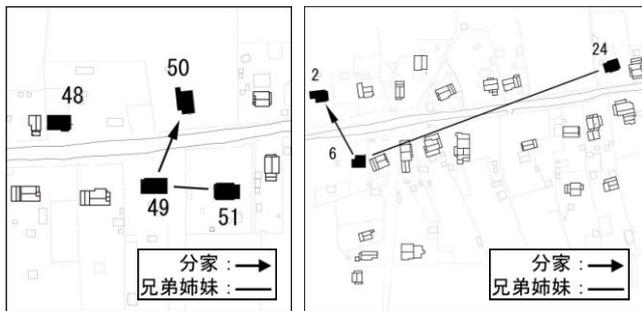


図4 集合型（親族集団I） 図5 分散型（親族集団K）

5.2 土地の取得方法と住居配置

土地の取得については、半数近くが親族から分け与えられている。その中でも、ほとんどが親が住む世帯から分け与えられた土地である。また、土地を分け与えた世帯と近い場所に住居が配置されている傾向がみられた。分家をし、親と子の関係がある世帯は比較的近い場所に住居が配置されていると前述したが、これと、土地の分け与えがおこなわれている世帯はほぼ一致していた。このことから、親子関係と土地所有には関係性があると考えられる。また、前述した親子関係における集合意識をより強く象徴するものでもあろう。

また、各世帯が保有する土地は柵によって区切られており、明確な領域が示されている。土地の権利保有者を明確にしていることを前述したが、このことから、土地の配分は集団内でおこなわれるが、土地の保有には「個」が表象されているように考えられる。

5.3 VK集落における住居配置

VK集落到に住むタイ・プワンの人々の住居配置には、親族ごと、あるいは姻族ごとのまとまりやその広がりあまりみられない。これらの要因として、親族・姻族組織が集落全体に複雑に広がっているということが考えら

れる。インタビュー調査の中で、集落の人々はみな親戚のようなもの、と言う人もいたように、集落全体が疑似的親族のような意識を持っているからではないのか。住居建設に関しても結いによるものが多かったように、集落全体がひとつのコミュニティとして形成されている。

しかし、その中でも親と子の関係がある世帯は近い場所に住居が配置されている傾向が多くみられた。さらに、土地の分け与えも親と子の間でおこなわれている場合が多い。このことから、兄弟姉妹を含めた親族関係内では集合意識は強くみられずとも、親子関係にもとづく集合意識は相応に強いと考えられる。そこには、土地を分け与えてくれた親に対して、養わなければならないという、扶養義務が子に課されていることも関係するだろう。また、集落内にはいない親から土地を分け与えられている場合も多くみられた。しかし、兄弟姉妹間には、このような傾向があまりみられなかった。このことから、VK集落到に住むタイ・プワンの人々は親と子の関係には強い意識があり、それが住居配置へ反映され、集落空間の構成の要因となっていると考えられる。

6. 結論

集落空間の構成を決定する要因のひとつとして親族関係の中でもとくに親子関係が重要であることがわかった。生活をするうえで集落全体が一つの親族集団のように機能し、集落を維持している。それ故に、住居配置のような空間構成には親族としてのまとまりは強くみられない。しかし、親子間で土地の分け与えがおこなわれるなど、親子関係は強く表れる。

われわれの住むまちの構成原理にも同じことが言えるのではないだろうか。しかし、現代の日本の家族構成は核家族が多く、親と同居、または近い場所に住むということがあまり見られない。親族内の関係よりも、周辺施設や交通の利便性など、生活により豊かさを求めることが重視されているのではないだろうか。時代が変化するにつれて、さまざまなものの利便性は向上していったが、同時にまちの構成原理も変化してきていると考えられる。

参考文献

- 『ラオス概説』 ラオス文化研究所（株）めこん 2003
- 『親族関係から見たチュニジアの住居、集落の構成原理に関する研究』 岡田 暁 板倉 純子 境 美由姫 曹 香伊 畑 聡一 日本建築学会大会学術講演梗概集 2000 P285,286
- 『マレー農村における家族構成に関する考察』 浅井 洋二 矢部 千尋 畑 聡一 日本建築学会大会学術講演梗概集2007 P57,58